

「これ、豊彦の記事でしょ？」

旧知の賀川豊彦研究者からの手紙に、古びて文字がかすれた新聞切抜きのコピーが同封されていた。

たしかに昭和38（1963）年、記者3年目の僕が書いた社会面記事で、見出しは「一粒の麦は生きていた」。賀川の小説『一粒の麦』の主人公嘉吉のモデルといわれた武内勝に会って書いたもの。研究者が最近、遺族に会ったとき、見せられたようだ。

賀川は明治21（1888）年、神



みちしるべ

戸生まれ。42年の師走、21歳の伝道師賀川は神戸・貧合新川のスラムに住み込み、救貧活動を始めた。一膳飯屋「天国屋」を開業するなど新川暮らし数年。そのころから賀川の片腕として行路病人など貧しい人々の世話をしたのが4歳下の武内。終生、賀川の事業に付き添った。賀川がときどき「僕（賀川）のやることは必ず歴史に残るよ」と言うのを武内はふしぎな思いで聞いたという。

昭和35（1960）年4月、賀川は東京で昇天した（享年71）。400万部の超ベストセラー小説『死線

を越えて』はじめ生涯に残した著作は300余。歌集もある。そして、

救貧活動、労働運動、農民運動、協同組合運動、キリスト教精神運動、平和運動など絶え間なく諸運動のリーダーとして活躍、ノーベル平和賞候補にも挙がったが一方、著書『貧民心理の研究』などには驚くべき差別表現の数があがり、その独断と偏見が指弾された。平和主義者なのに、太平洋戦争を支持した矛盾もあり、賀川ほど今もなお評価の振幅が激しい人物はいない。

しかし、僕は明治も終わりの頃、单身、スラムに住み込み、救貧活動を始めた青年賀川の熱誠をつゆほども疑っていないし、やっぱり、近代日本のすごい「巨人」だったのだ、と思う。「僕のやることは、歴史に残る」この若き日の自信、使命感、名譽欲、「うぬぼれ」が賀川の一生を導いたのだ、と思う。恐るべし、青年の「うぬぼれ」…。

今年賀川献身100年とか。青年豊彦が救貧活動に身を投じて100年目ということで各地で記念行事があるが、Pウォークも大正10（1921）年7月、炎天下の神戸、賀川を先頭に4万人が歩いたあの大デモ行進のコースを歩いてはどうか。大阪、東京、徳島などでも「賀川Pウォーク」はできる…。

津田 康（元毎日新聞記者）

青年よ、うぬぼれ、るべし